『**大地**(Earth)(06/04)』

今から四百万年以上前
Laurasiaは
AfricaとEurasiaの
結合が進んでいた

そのAfrica plateauに
地上で初のSavannaが出現し
森に住んでいた類人猿は
Savannaへと
生活圏を移す冒険をした

彼らを猿人と呼び
彼らこそヒト進化の原点となった
彼らはSavannaで二本脚で立った
　Ardipithecusであり
　Lucy(Australopithecus)である

今から百九十万年前以後に
地球は地軸が二十二度近似値に傾き
大地は氷河時代へと入っていた
Savannaに出た類人猿は

Homo habilisの出現を見る

彼らは石器を使い
彼らは集団生活を成し
彼らは一種の住まいを持った

Homo habilisの脳は
猿人や他の類人類よりも進化し

Homo habilisは
脳臓器 増加ゆえに
子供を未熟児で出産し
それ故にこの期に
男性と女性の仕事分業が成された
それ故にこの期に
一夫一妻制が確立した

Ardipithecusも
Lucy(Australopithecus)も

Homo habilisも
Savannaを出ることも無く
その三千キロに及ぶ
Great Rift Valleyに留まっていた

このSavannaから最初に
Eurasiaへと拡散したのは
約百万年前に出現した
　Pithecanthropus Erectusである

Pithecanthropus Erectusは
初めて火を使った
彼らは幾度となく
Great Rift ValleyからEurasiaへ
Europeへと拡散を成した

Ardipithecusも
Lucy(Australopithecus)も
Homo habilisも
この大地へと拡散していった
Homo erectusも

過去に 絶滅消えていった

今日の世界各国に生きている
現世人類の共通祖先の「新人」が
今から二十万年前の
東アフリカ大地溝帯に新に出現し
初めてこの大地を克服しなしえた

ヒト進化は単独ではなし得ず
地球共存系の一員として成してきた
私たち新人も
この拘束からはの開放はない
だからこそ
大地を克服した新人であっても
ヒト中心主義的な環境利用が
共存系の崩壊を意味したとき
ヒトの存在も危険になってくる

神よ 私たちは
ここにおいて 地球共存系という
歴史的拘束からヒトを解き放し
宇宙へと拡散していくことを
見守り下さい

その昔
ヒト属は大地溝帯から拡散しては
絶滅し
幾度とヒト類の絶滅を繰り返し
今 全地球を克服したヒト進化は
宇宙へと拡散のレールを走っている

?

『六月』(06/09)

夏が待ち遠しいです
曇りの空を見上げながら
そんな思いの六月です

雲を見ていると
切れ目切れ目に蒼い空が見え

青空のドームの下にいるようです

一番星も輝いているのでしょうが
どんよりした雲が覆って
ホームからも見えません

いつもと同じく
電車が着いて人が降りて
人が乗って四両電車が走っていく

帰宅路を急ぐ人も
駅舎の前で雑談する高校生も
いつものとおりです

人の悩みなど
雲は知らないのでしょう
雨を降らすか青空を隠すか

夏が待ち遠しいのです
強烈な輝きが恋しいのです

道を焼いてくれる眩しい日差しが

コンクリートの壁と
頑丈なガラス窓が
外との会話を閉ざすのです

樹が揺れていても
雀が屋根を飛び跳ねていても
景色のように見ているだけ xe

夏の眩しさが恋しいです
夏の日差しが恋しいです
雲間の青空が輝いています

『月照 (06/09)』

恋している女は
美しい
愛している女も
美しい

一年二年と
憎み合い蔑み合い
それでも夢は消えずに
身体を絡ませて

何時か男は希望も失い
女も何時か夢を失い
絡んだ糸は風まかせ
男と女は哀れです

自分だけは助かろうと
男の情も女の情も
だからといって
糸を切ることは出来なかった

女が刃物を握ったとき
男は観念した
これで死ねるなら
女を犯人にしたくなかった

女を跳ね飛ばし
突き刺さった柄を

自分の手でぐいぐいと
女の驚愕を見ながら

物言わぬ男抱きながら
女は狂った
月に向かって
女は譫言を言っている

男と女は哀しいですね
男と女は苦しいですね
男と女は淋しいですね
男と女は孤独ですね

『魔性 (06/10)』

もう見れないのだろうか
あのぞくぞくする
魔性への変化を
追い詰められ
後が無くなったとき
突如として魔性に変わる一瞬を

Stefanie Maria Graf が
もう一つも落とせない
絶体絶命に追い込まれた時
突如として
テニスとはこういうplayを言うのよ
魔性を露にして淡々と打ち始める

あと一球 しかも私がサーブ権
女王になれる
Graf へ 挑戦者がここぞと打ち出す
何人の強者が 打ちのめされたか
ボレーをしながら
彼女はGrafに震え上がる
魔性化としたGraf
返せるはずのない球を安々と打ってくる
テニスとはこういうplayを言うの
今までのは遊びよ
挑戦者の耳元に響いてくる魔性の声
Grafが繰り出すファインプレイに
場内は興奮のるつぼとなり
あと一球で女王にはずの挑戦者が
完全に立ち上がれないほど
叩きのめされる

魔性に変幻した華麗なStefanie Maria Graf
黙々と打ち返し始めたGrafの落ち着き
場内を興奮の坩堝と化するGraf
一つも落とせない追い詰められてから
これがテニスのplayよとばかりに
ファインプレイの連続舞で凌ぐGraf

もう見れないのだろうか
あのぞくぞくする
魔性への変化を
追い詰められ一球もミス
出来なくなったとき
突如として魔性に変わるあの一瞬を

『A flock of clones (06/11)』

もしも十才の細胞から
クローンが誕生したら
その生命は何歳なのだろうか
一歳なのか十歳なのか

走っている電車へ乗るのは難しい
同じ速さで平走しないと失敗する

止まる電車を待って乗った
ドリーは
進化を走っている生命体へ
同じ速さで乗せることに成功した
閉じた細胞を培養液で進化を促進させ
タイミング良く進化を走っている
生命体へ乗せるのに成功した
時間誤差は三日ぐらいであろうと
速くても遅くても死んでしまうと

医学の世界では無理であった常識を
畜産の世界が覆した
ドリーは年間研究予算一億円
一年に約六百頭のヒツジ実験
五年の継続後 述べ五億円三千頭の中で
初めて成功した一頭である
医学が負けじとヒトの誕生を目指す

ヒトは進化の速さに平走出来るか
だけの問題であるから
マウス実験体では進化速度が速すぎて
乗せることが出来ないと
今までの医学界常識であった
ヒトはマウスとヒツジの
進化速度の真ん中であると

三千頭の二倍 六千体を実験すれば
ヒト一体はクローン人間を宿るはず

科学が人にとって危険なことは
危険だから止めようという叫び
そうなれば 秘密で研究されてしまう
社会へ研究発表の義務が無くなる
科学研究はおそろしい

ドリーは 論文がたえず発表されきた
ヒトへの 研究もそうであって欲しい
何処で困難にぶつかっているか
クローン人間への道筋を突けるのか
衆知の中で進行して欲しい

なぜ 培養をしなければ
・・・ わからない
なぜ 進化を驀進している体へ
・・・ も わからない
結果 ドリー が産まれた
結果 ヒト クローンが産まれる

五十歳の体細胞から
その人のクローンが誕生したら
その赤ん坊は何歳なのだろうか
一歳なのか五十歳なのか

老化した分化体細胞が
再び培養液によって初期化し転移し
クローニングを経て ヒトになる
その子は 何歳なのだろうか

『孤独 (06/12)』

悲しみに染まるとき
人はどうするのだろうか

一人涙をこぼして
朝が来るまで耐えるのか

悲しみに染まるとき
人はどうするのだろう

泣いて泣いて泣いて
朝まで痛みの心で耐えるのか

人はどうして淋しいのか
悲しむために
産まれたわけではないのに
人はどうして一人なのか
多くの人がいるというのに
人はどうして孤独なのか

愛すらも失って
私はどうやって生きればよい

愛すらも失って
私はどうやって生きればいい

一人孤独の中で
時の過ぎるのを耐えるのか

悲しみの中で

涙を流して朝を待つのか

『**孤独**(06/15)』

悲しみに暮れたとき
人はみなどうするのだろうか

愛すらも失ったとき
人はみなどうするのだろうか

思い出に浸り
痛む心を更に締めつけるのか

でも知って欲しいの
人はみな一人ではないことを

傷つけあって
愛し合って生きることを

でも知って欲しいの
何時か陽の輝きに囲まれることを

きっと人生の何処かで
日の輝きが待っていることを

今は辛くて苦しいでしょうが
夜に心は痛むでしょうが

でも知って欲しいの
愛しむことを自分を責めないことを

深い谷底に沈んでいても
貴方を必要としている人がいることを

悲しみに暮れたとき
人はみなどうするのだろうか

愛すらも失ったとき
人はみなどうするのだろうか

『**優しさ**(06/19)』

哀しいのですね
泣いているのですね
胸が潰れそうな痛みですか
淋しいですか

我慢せずに
涙を流した方がいいですよ
我慢せずに
噎び泣いた方がいいですよ

だって
痛みにはそれが一番優しいのですから
だって
どのみち堪え忍ぶしかないのですから

人生ってそう言う時が有るのですよ
海の底に沈むような日々がね
人生に何時かは来るのですよね

別れの時がね

自分が弱くていいじゃないですか
哀しくて哀しくて
胸が潰れそうに辛くとも
泣いて耐えるしか私には出来ないのです

『**自愛**(06/26)』

悲しみを耐えても
次の悲しみが来るだけです
淋しさを耐えても
次の淋しさが来るだけです
孤独を堪え忍んでも
次の孤独が来るだけです

朝が来て夜になって
次の朝が来て一日が始まって
また明日が来る
春が来て夏が来て
秋が来て冬が来て
また春が来て

巡る巡る人の世を私は愛しいのです

花が咲いて
水が温んで
果樹が実って
吹雪が来て

愛しいのですよ
生きていることが
笑顔に出会ったり
泣き顔に出会って
途方にくれたり
私は愛しいのです
生きていることが

孤独を堪え忍んでも
次の孤独が来るだけです
淋しさを堪え忍んでも
次の淋しさが来るだけです
悲しみを乗り越えても
次の悲しみが待っているだけです
でも私は生きていることが
愛しいのです

自分がたまらなく愛しいのです

『**脳死**(06/27)』

まだ温かい身体が
切り裂かれていく
心臓はそれでも
規則正しく脈打っている
鋭利な刃物は彼の皮を切り
鋭利な刃物は温かい肉を切断し
心臓が動いているうち
彼の臓器は取り出された

息子さんは脳死です
脳死は死ということで

どうでしょう
世の中のために役立ててくれたら
死ぬ人間が一人助かるのですが

家族は苦しんだ
が結論を速く出さなければならない

息子の死を社会に役立てよう
家族はそう決断した

立ち会っている家族の前で
私はまだ心臓が動いて
身体が温かい彼に刃物を入れた
彼を殺すために
彼の臓器を獲るために

脳死
医師と国家権力が
移植のために作った
新しい死

『苦しみ (06/27)』

患者は何年もの間を
眼を閉じ　呼吸だけである
言葉を話すことも
眼を開くことも
眠れる　意識のない人形の如く
脳活動が止まった患者が
ある時期に再活動の・・皆無です
正直・・その研究も皆無です
ほとばしる囁きは
出る言葉はこれだけである

この子に
産まれてきた喜びを
味わわせたい
母親は人生の前で苦しんだ
それでも
人のまだ動いている心臓の
温い身体から取り出される臓器
移植を拒んだ

何とか生かしたい
どちらの母親も
子への思いは同じでしょう

『移植 (06/27)』

家族の立ち会っている中で
私は一人の人間を殺す
まだ心臓は脈打ち
身体は温もりを持っている彼を
呼吸だけの彼を
いま私は鋭利な刃物で
皮を生身の肉を切り裂き
彼の臓器を摘出し始める
失敗は許されなかった

家族はうちしがれ
母親はおろおろしていた

思いもよらない光景なのだから
理解できない光景なのですから
反応もなく
ただ呼吸だけの息子であっても
心臓が動いているとは
身体が温もりを持っているとは
母親は脳死を実感しなかった
私が切り裂いていくのを
ただ見ているだけしかなかった

『苦しみ(二) (06/27)』

一年が過ぎても
二年が経っても

母親は自分が息子を殺したと
苦しみ懺悔している

呼吸だけの眠る患者の負担を
いゃ！　長年 誰が保証する
眼は閉じ ただ一途の呼吸のみ
心臓は脈動し
身体が温かい彼には
脳が活動していなくとも
生きる権利が有ったと
母親は後悔した

母親は
今でも自分自身を責めている
人が言う 時が過ぎれば？
いゃ！　そう何かを自身で掴む

脳の活動停止状態を
医師と国家権力が
移植のために作った
新しい死の定義 なのです
これで 人が助かるのだと

『夢 (06/27)』

夢を失わずにいるって
大変ですね
希望を燃やし続けるって
大変ですね

夢の花って
咲くことがあるのでしょうか
希望の花って
咲くことがあるのでしょうか

桜の花って
美しいですね
チューリップだって
綺麗ですものね

希望を膨らまして
夢を育んで
青空へ夢を描けたら
あの雲の様にね

希望の花って
どこに咲いているのでしょうか
夢の花って
どこで栽培しているのでしょう

希望を燃やし続けるって
大変ですね
夢を失わずにいるって
大変ですね

『雲 (06/27)』

白い雲が
ふんわりふんわり
碧いお空に浮いている

いいな〜自由で
下を見ているのかな〜
悲しみってないのかな〜

そこから下を見たら
都会や村や通りは

どんなに見えるのでしょうか

そこから下を見たら
人間は大きく
見えるのでちゅか

白い雲が
ふんわりふんわり
青いお空に浮いている

碧い空と白い雲と
木漏れ日を写しながら
木立の中を
水が流れています
小鳥の鳴き声を聞きながら
木の葉の囁きを聞きながら
小川の中では
魚がゆうゆうと泳いでいます

End all 1997/06

『**小川**（06/27）』

水が流れている
きらきら光りながら
ひたひた音を発てながら
幾つも幾つも流れている
眩い太陽のもとで
水は温みながら
森の中をゆっくりと
流れています